

夕さん 2017.12

物部俊之

夕さん 作 物部俊之

一話

花を一輪いただいた。茜色の空の下、空気までもが赤く染まって見える景色の中で、小学生くらいだろうか、女の子がこれあげると花を一輪、私に差し出したのだった。

これでも、一人暮らし、いや二人暮らしの女であり、会社に勤めて一年、ちょっとばて気味の社会人でもある。

子供から何かいただくというのは、大人として、少しばかり遠慮すべきなのだけれど、赤く染まったその女の子が、なにやら妙にいとおしく、つい、手を伸ばし、花を一輪受け取ってしまったのだ。

ありがとう、女の子はにっと笑みを浮かべると、きびすを返し、人込みへと消えて行った。

人込みって、私は初めて気が付いたのだ、賑やかな雑踏に辺りを見回す、駅前の店からは、いらっしやいらっしやいませの大きな声、派手に浮かれた音楽、私は夕飯の買い物で賑わうたくさんの人達の中にいたのだ。

「夕子も物好きというかなあ」

半透明の夕さんが、溜息ついて、ガラスコップに活けた一輪の花を眺めた。半透明の夕さん、十代後半くらいの綺麗な女の子である。半透明の夕さんはその名の通り、向こうが透けて見える、手を伸ばせば、手が擦り抜けてしまうのだ。幽霊とか座敷童子みたいなものかもしれないけれど、本人にはそういう自覚はないらしい。私は私だ、が、夕さんの自分自身に対するしっかりとした評価である。

うちの親が言うには、お産で私が生まれる時、母さんの横でしっかりしっかりと叫んでいたのが、うちの親達が夕さんを初めて見た時で、暢気な親だ、ガスの火を消し忘れてたときや、鍵の掛け忘れなんか、ちゃんと、夕さん、教えてくれるのよ、助かるわあ、なんてほざいているのだ。私が子供の頃は、夕さんはお姉さんで、いまは、なんだか生意気な妹で、それは夕さんがずっとかわらないのに、私が大人になっていったからだけれど、多分、夕さんの中では、まだ、私は妹で、子供なのだろう。父さんと喧嘩して家を出た時も、私について来てくれたのは、頼りない私が心配だったのだろうと思う。

「それ、なんて花だろう、百合かな」

「百合とは花の形は似ているけれど、葉の形が違う、この花、夕菅って云うんだ。夜に咲く月の色した花。朝にはしぼんでしまう」

夕さん、立ち上がって、窓から外を眺めた。

「見てごらん。上弦の月の色」

夕さんは実体がないので、体を突き出せば、上半身がカーテンも窓も擦り抜けてしまうけど、私はそうはいかない。カーテンを開け、外を眺める。

中空には檸檬の色をした月が浮かんでいた。真っ黒な画用紙をくりぬいた月、闇の中、冴え冴えと輝いている。

「月の輝きに回りの星が隠れてしまった」

夕さんが月を睨む。

「さて、月の角っこに、綱掛けて、何か引き上げようようというなら、これも縁というもの、少しばかり手伝ってやってもいいさ」

夕さんがにっと笑みを浮かべた。

「どういうこと。夕さん」

「夕子。しっかり晩御飯を食え。食ったら、出掛けよう」

「足が痛いよお、帰りたいよお」

私の泣き言に、きりきり歩けと夕さんが楽しそうに笑う。全くの闇の中、あの夕菅の花が仄かに月の色を足元に照らしていた。肌の感覚が微かに湿気を感じている、雨上がりなのだろうか。見上げてみても、真っ黒な闇。

「夕さん、一緒に居てよ、何処にも行っちゃだよ」

「大丈夫。隣りずっと歩いてやるよ」

「ありがとう、夕さん」

「どういたしまして」

にかっと、夕さん、自信に満ちた笑顔で笑った。

私達は夕菅に導かれるまま歩いているのだ。夕菅を持つ私の右手が磁石に吸い寄せられるみたいに、歩く方角を決めて行く、私と夕さんはその後を付いて歩く。もう何時間も歩いているようにも思えるし、十分か十五分くらいにも思えるし、でもそうだ、足のだるさを思えば随分と歩いているに違いないと思う。

「ねえ、夕さん。いつか聞こうと思っていたこと、いま聞いて良いかな、多分、今じゃないと聞けないと思う」

「いいよ。歩いているだけじゃ退屈だ」

「あのね。夕さんは齢もとらないし、透けているし、手を伸ばせば擦り抜けてしまうし、私の幻覚、幻なのかなって思うこともある、でも、夕さんはお隣りさんとも仲がいいし、商店街のおばちゃん達とカラオケで歌っていたりする、近くの高校生に告白されて、ガキに興味はねえって断ったりもしていた。夕さんは何なの」

「確かにそれはご飯食いながら尋ねることのできる質問じゃないな」

夕さん、怒らずに真面目な顔をして答えてくれた。

「私は気づいた時、難産で苦しんでいる女性の隣りにいた、うんうん唸っていた。夕子を産もうとしている母さんの隣りだった。実は私にはそれ以前の記憶がない、まったくないんだ。だから、夕子の問いに答えることは難しい。ただね」

夕さんが私に向かって笑みを浮かべた。

「私は自分自身が何者かはわからないけど、これから、こうなりたいと思ったし、こうなろうとした。夕子のお姉さんにさ」

「私のお姉さん」

夕さんが照れたように笑って頷いた。

「だから、夕子は大人になってしまったけど、私にとっては今も妹だ。夕子がおばあちゃんになっても、この夕さんの妹だ」

夕さん、ふいっと笑顔を消して、視線を前に向けた。長い付き合いだ、わかっている、夕さんは案外、照れ屋なのだ。

「お姉ちゃん、ありがとう」

思い切って言ってみた。夕さん、聞こえない振りをしているけれど、ほんの少し笑った。

そうだ、小さい頃はお姉ちゃんと呼んでいたんだ、いつからだったろう、父さんや母さんと同じように夕さんって呼び始めたのは。

夕さんの少し寂しそうな笑顔を思い出す。

「夕子。見えるか」

夕さんが囁いた。

月だ、空の高みに、夕菅と同じ色の上弦の月が浮かんでいた。微かな月明かりに辺りを見渡してみる。

月のかけら、月が欠けて落ちたように、夕菅の指し示す方向に光が灯る。

「あれは夕菅の花だ」

あの女の子が夕菅の花を片手に俯いていた。慌てて駆け寄る、女の子は信じられないようにぼおっと私の顔を見つめた。

「来たよ。さっきは花をありがとう」

急に女の子がごめんなさいと呟いた。

「え、どうして」

私の声に夕さんが呆れたように言う。

「ま、そうとしか言いようがないもんな」

夕さんが女の子の横にしゃがんで、地面を覗んでいた。

「随分、深いし、冷たそうだ。夕子、来てみろ」

夕さんの隣り、しゃがんでみる。直径一メートルくらいの穴だ、まっくろで月の光も届かない。井戸のような、深い穴が地面に穿たれていた。

何か動いているような気がする。

「目を凝らしてじっと見てみろ」

夕さんが穴の真ん中を覗みつけたまま、呟いた。

目が慣れてきたのか、穴がほのかに青く光り出した、

「意識すれば見えてくるだろう、穴の中が」

子供たちだ。たくさんの子供たちが青い水の中から水面を叩き、泣き叫んでいる。

夕さん、ぎろっと女の子を睨みつけた、女の子が夕さんの視線を恐れるように俯く。

私、手を伸ばし、水の中の手を両手でしっかりと握った。なんて冷たいんだ、氷、いや、そうじゃない、もっと深い、心にしみ込んでくる冷たさだ。

「ええっ、夕子、なんで掴むんだよ」

振り返った夕さんが驚いて声をあげた。

「え、あの。引っ張りあげたほうがいいかなあって、えっと、うん」

「その穴は生と死の境、煉獄だ。落ちたら這い上がれないぞ」

「でもそんなところに子供が落ちているのなら、引き上げなきゃ」

私、おもいきり手に力を入れる、子供の手、引っ張りあげてやる、重い、なんて重いんだ、動かない。

夕さんが叫んだ。

「夕子、頭の中で引っ張りあげた時の子供の顔を思い浮かべろ。笑顔を思い浮かべるんだ」

夕さんの言うように、幸せそうに笑顔を浮かべる子供の顔を思い浮かべる。ああ、これ、私だ、私が子供の頃の顔だ、夕さんと一緒に公園で遊んだときの笑顔だ。

ふっと腕が軽くなった、小学生くらいの少年の体がふわっと空中に浮かんだ。手を離すとゆっくりと月に向かって浮かび上がっていく。

「夕子、しっかり。まだ、次がいるぞ」

夕さんの声に穴を見ると、次は女の子の手だ、ゆらゆら、揺れていた。ぎゅっと握りしめる、なんて冷たい手だ。持っているだけで体の中まで冷たくなっていく。

おもいきり、引っ張りあげた。幼稚園くらいの女の子だ。次々と、もう、わけがわからないくらい、たくさんの子供達を引っ張りあげる、女の子、男の子、多分、高校生から、下は、臍の緒をつけた赤ん坊まで、皆、とても冷たい手だ、どんどん、私の手も冷たくかじかんでいく、でも、この穴が闇そのもので、こうやって手を差し出すなら、なんとか、この闇から子供達を引き出してやりたい、母性だかなんだか、わからないけど、子供達が辛い思いをするのは嫌だ。

「夕子、この子が最後だ」

夕さんの声に手を見つめて、息を飲む。これは、生まれる前の子供の手だ、まだ、お母さんのお腹の中にいたはずの手だ。手を握って、もう片方の手を闇の中に差し込む。手が痛い、冷たいを遙かに越えて、手がちぎれてしまいそうだ。なんとか、両手で赤ん坊を引き上げる、手を離すと、ふわりと赤ん坊が浮かんだ。

「もう、限界だ」

背中から地面に倒れ込む。万歳の形で倒れてしまった。見上げると、いくつもの子供達が上限の月に向かって昇っていく。

「お疲れさま」

夕さんが少し笑った。

「夕さん。あの子達、どうなるんだろう」

「わからない。でも、闇の中、膝を抱えて震え続けているよりはずっとましだろう」

夕さん、ほっと息を漏らすと、私の横に座った。

「ね、あの子達っていったい何だったんだろう」

「親からの虐待で殺された子供達だ、この穴は煉獄、生と死の間にあるという世界、もがり、かりもがりともいう死に待ちの場所だ。多分、思いが強すぎて死ぬことも、次に生きることもできなかったんだろう」

しばらくして、体を起こすと、さっきの穴は消えていた。女の子だ、女の子が正座して俯いている。足引きずりながら、女の子の前へ這う。

ごめんなさい、俯いたまま、女の子が呟いた。

「謝ることはないよ。お姉ちゃん、ちょっとばてだけさ」

手が、と女の子が言いよどんだ。

どうしてだろう、私、女の子の手を取って、私の頬にくっつける。

「ほら、手は冷たくなったけど、ほっぺたは暖かいぞ」

驚いたように女の子が顔を上げた、でも、泣き出しそうな笑顔を浮かべてくれた、そして、かき消すようにその姿が消える。

「え、あ、ど、何処に行ったの」

「下、見てみる」

夕さんが指さす先、小さな女の子の人形が転がっていた。

「服装や髪型、同じだろう」

私、人形を拾い上げて、どうしてだろう、しっかりと抱きしめた。

なんでだ、泣きそうになる。

「少し明るくなってきた」

辺りが見える、夕菅の花はしぼんで、朝日が昇る前の、朝まだき、うっすらと青色に辺りが染まる時間だ。

「ここって」

「近所の河原だ。歩いて五分ってとこだな」

「うん。見覚えある。あそこの橋、毎日、歩いているよ」

「徹夜だな」

「うん、お肌に悪いなあ」

「ついでに言うと、夕子、今日は仕事、休みじゃない。ま、頑張ってくれ」

あああ、なんだか、溜息をついてしまった。

「帰って、ちょっとだけご飯を食べてから、仕事に行くよ。ね、夕さん、この子、連れて帰っていいかなあ」

「そのままにすれば、水に流され、ゴミ扱いだ。いいんじゃないかな、連れて帰って」

夕さん、そっと笑みを浮かべた。

ゆっくりと立ち上がる、朝の空気が気持ちいい。川風が上流からゆっくりと流れてくる。

「夕子。同じようにさ、また、子供の手を引き上げなければならなくなったらどうする」
夕さんの言葉に、自分の両手を見つめた。少し、両手に暖かさが戻ってきたように思う。あの冷たさはなんだったんだろう。氷を掴むなんてものじゃない、心に直接襲ってくるような。あれは、あの子達の絶望や恨みや怒りなのか。ううん、そうじゃない。あれは、願いだ。生きていたい、笑顔を浮かべたい、そんな切な、そして単純すぎるほどの強い願いなんだと思う。

「あの子、ごめんなさい、って言っただろう」

「うん」

「今までにもたくさんの大人に救って欲しいと、闇を渡るための夕菅を渡していただろうと思う。全部、だめだったんだろう、だから、あの子は夕子が来たことに驚きと、胸が一杯になって、ごめんなさいの一言が精一杯だったんだと思うよ」

夕さんの言葉にじっと腕の中の人形を見つめた。薄汚れてしまっているけれど、とても可愛い人形だ。この子も辛い思いをしたのかな、こんな小さな人形なのに。

「泣いているのか」

「ううん、泣いていないし、泣かない」

ぎゅっと歯を食いしばった。

「こういうとき、絶対に泣いたらだめなんだと思う。涙と一緒に思いが流れて行ってしまうから」

夕さんも立ち上がると、にかっと子供のように笑った。

「夕子、しっかりしたな」

「うん」

どうしてだろう、素直に頷いた。

多分、私は、次も手を掴むだろう。逃げずに、知らぬ振りせずに、手を掴んで、引き上げる。ふと、気がついた。夕さんは私を引き上げてくれたのかもしれない。

なんだか、不思議にそう思えて仕方がない。

「お姉ちゃん」

「いいよ、夕さんで。なんか照れる」

「ううん、いまはお姉ちゃんって呼ぶ。ありがとう、お姉ちゃん」

夕さん、照れ笑いを浮かべて、顔をそむけた。

「どういたしまして」

二話

夕暮れ時の商店街は小さな希望とあふれる大きな落胆だ。口々にお喋りを繰り広げる人たちが、

水が流れるように、私を通り過ぎていく。

賑やかな音楽が流れ、いらっしゃいませの掛け声がいくつも重なる、でも。

歩道の端に立ち止まったまま、私は思い出す。

そして、ああそうだったよなと、一人納得して、家路へと歩き出すのだ。

「ただいま、夕さん」

「お帰り、夕子」

カーテンを開けた窓から、薄墨色の空が見える。窓を背に夕さんが座っていた。

夕さんの体を通して空を見る、ふと、私まで空の中程にいるような気がして、信仰心なんて欠片もない私だけど、夕さんは天使かもしれない、そんな気がするのだ。ちょっと、言葉の乱暴な天使だけど。

はっと気づいて、灯りを灯す。夕さんは蛍光灯のスイッチを入れることが出来ない、指がスイッチをすり抜けてしまう。

「やあ、明るくなった。ありがとう」

そういうと、夕さんは倒したスーツケース、それをいつものように椅子代わりに座る。

「晩ご飯の用意をするよ」

「うん」

夕さんが元気よく返事した。

夕さんは暗いのが苦手だ。まだ、私が子供の頃だった、二人で留守番をしていた夕刻、強い雨が降っていて、遠雷、遠く、雷が鳴っていた。

暗くなるにつれて、雷が近づいて来る、いきなり、どんって、雷が落ちた、そして、停電になったんだ。

私、薄暗がりの中で、夕さんがうずくまって声を押し殺すように泣くのを見た、最初で最後の、夕さんの泣く姿だった。そして、私は知った。夕さんは何を触れてもすり抜けてしまう。実体としての体がない、だから、闇の中、自分自身が闇にとけ込んで消えてしまうのではないか、私やお父さんやお母さんに会えなくなるかもしれない、喋れなくなるかもしれない、忘れられてしまうかもしれない、そう思うと、怖くて、悲しくて泣いてしまうんだってこと。

いまはもう、停電になっても夕さんは泣かないけれど、夕さん素振りも見せないようにしているけれど、私も全然気づかない振りをしているけれど、今も夕さんは闇が怖い。

「いい匂いがしてきた」

横から、夕さんがフライパンをのぞき込んだ。

夕さんは味のしっかりしたのが好みだ、はっきりとした匂いがあるから。

「野菜炒め風チャーハンと溶き卵とトマトのスープ、香辛料ちょっと多めにしたよ」

「ありがとう、嬉しいなあ」

私、ちょっと溜息をつく。

「どうしたんだ、夕子」

「なんていうかなあ、二十年くらいしたら、夕さんと私、親子だなあって思った」

「というより、夕子も結婚して、私くらいの子供がいるだろう」

諭すような夕さんの言葉に、一瞬、不安がよぎる。

「夕さんもいてよ、私がおばあさんになっても、一緒にいてよ」

「ああ、頑張るよ」

ちょっと、いたずらげに笑みを浮かべて、夕さん、椅子代わりのスーツケースに戻った。

折り畳み式の小さなちゃぶ台にチャーハンとスープを二つ、一人分を二つに分けたものだ。それに、小皿にちょっとだけ、チャーハンを載せて、ちゃぶ台に載せた人形の前に置く、あの娘だ。

「夕さん、この子、元に戻らないかなあ」

「元に戻るもなにも、これが本来の姿だ。よほど強い願いがあって、人の姿に化身していたんだろう。古いもの、情の強いものには心が宿る、付喪神と呼ばれるものだ」

夕さんがスープに顔を寄せる、夕さんは食べることができない。ただ、匂いをかぐんだ、それが夕さんの食事で、濃いめの匂いをかぐとお腹がいっぱいになる、だから、ちょっと濃いめの味付けをするんだ。

「私は何も出来ない、料理も作れない。蛍光灯のスイッチすら押せない。夕子の世話になりっぱなしだ。だから、せめてさ、夕子の悩み解決に手を貸してやりたいと思う」

夕さんがいたずらげに、にっと笑った。

「この娘が、何故、人を導き穴に落ちた子供を引き上げさせようとしていたのか。それを考えてみよう」

「それは、落ちた子供が可哀想だから」

ちょっと自信ない。

「なあ、夕子。外国の紛争地帯で子供が空爆で大怪我してさ、可哀想だと思う、でも、さすがに飛行機乗って助けに行きはしないだろう。でも、夕子が大怪我をしたなら、私はまさしく飛んでいくぞ」

「つまりそれは、この娘の大事な人が穴に落ちてしまった」

「この娘を可愛がっていた女の子が親の虐待が元で穴に落ちてしまった。この娘はその女の子を救い出したい、その強い願いが、あの姿を生み出したんだろう」

「それじゃ、その女の子が見つかったから、人形に戻ったっていうことかな。空に浮かんでいった子供たちの中にいたのかな」

夕さんが大げさに溜息をついた。

「あんな穴はいくつもある。大人は、理由をつけては子供を犠牲にするからな」

夕さん、正座をして、あの娘を見つめた。

「大変だったろうと思う。助けてくれる物好きな奴なんかいない。夕子」

「は、はいっ」

「お姉ちゃんのほっぺたは温かいぞなんて、子供の絵本かよなんてことするもんだからさ」

夕さんが、私の顔を見て、にやりと笑いかけた。

「この娘、ほあんってなってしまうって、本来の姿に戻ってしまったわけだ」

「それって、私の責任」

「別に責任だとか、そんなんじゃない。いつかは知らないけれど、いずれ、女の子の姿に戻るさ、願いはまだ叶っていないからな」

「私、腕立て伏せするよ、力つけて、子供たちを引っ張りあげられるようにする」

夕さんが涙を流して笑った。

「私的には思うところもあるけれど、ま、筋トレ頑張ってくれ」

夕さんが匂いを嗅ぎ終えた分も私が食べる、少し、味が薄くなった気がして、ほっとする。

そして洗いものを済ますんだ。会社では新入社員として雑用全般も本来の仕事に加えて押しつけられているから、なんだか、へとへと、心が折れてしまうぞ、社員を大事にしろって思うけど、夕さんと晩ご飯を食べながらお喋りをすると、なんとかやっていける。

いつまで経っても、私にとって夕さんは頼りがいのあるお姉さんだ。こんなこと、口に出すとしてっきりしろと叱られそうだから、言わないけれど。

振り返れば、夕さん、じっとあの娘を見つめている。

夕さんは時々不思議だ。私には見えないものを見、聞こえないものを聞いているような気がする。

私がまだ中学生の頃だったと思う。

私、思いついたんだ。夕さんはものに触れることができない、すり抜けてしまう、でも。

夕お姉ちゃん、夕お姉ちゃん。

私、凄いことを思いついたんだ、夕さんに正座してもらって、私も夕さんのすぐ後ろに正座をする、そして、左手をぎゅって伸ばして、夕さんの左腕と重ねたんだ、そして、この腕は夕さんの腕だって思いこむ。

そしたら、すうっと、左手の感覚が無くなって、夕お姉ちゃん、どんな感じって、私、無邪気に言ったんだ。

夕さん、驚いて左手を顔に寄せて言ったんだ、

「体って。温かいなあ、ありがとう、夕子」

「うん」

私、得意になって、頷いた、でも、急に夕さん、左手を引き抜くと、私に向きなおって、睨んだんだ。

「ありがとう。でも、二度とするな。これは夕子にとってやってはならないことだ」

今にして思う、私は無邪気に自分の体を夕さんに明け渡そうとしたんだ。それを夕さんが、たしなめたんだ。私は夕さんに叱られてしゅんとしてしまったけど、でも、なんだかとっても嬉しかったんだ。

「おおい、夕子。用事が済んだら、こっち、来てくれ」

夕さんの声に洗い物を終えて、振り返る。

夕さんはあの娘を正面からじっと見つめていた。そして、後ろに回り込んで見つめたり、上からのぞき込んだりしている。

「どうしたの、夕さん」

「夕子。ちょっと、この娘を持ち上げてくれ」

夕さんに言われるまま、両手で持ち上げてみる。

夕さんが下からこの娘を見上げる。

「無いなあ」

「えっと、何がないの」

「扉。ドアだ」

「え、ドア」

「そうだ。夕子だってそうだろう、他人宅行ってさ、ピンポンって呼び鈴鳴らして、こんにちはって言うだろう。なけりゃ、ドアをとんとんって

叩くだろう」

不思議そうに夕さん、私を見つめる。

「えっと、つまり、家のドアを探しているってこと」

「あの娘にとって、この姿は家のようなもの、呼び出してやろうと思いついてさ、扉を探している」

夕さんが、嬉しそうに笑った。

「夕子はあの娘に早く会いたいんだろう」

夕さんは凄い、そんなの思いつきもしなかった。夕さんはどうして、こんな不思議なことを知っているんだろうと思う。一度だけ、夕さんにどうして、不思議なことを知っているのって尋ねたことがあった。

夕さん、びっくりしたように言った。そんなの常識だろう、夕子、少しは勉強しろよって、いたずらが成功した子供のように笑っていた。

「見つけた。左の小指だ、こいつは大変だ」

夕さん、小さく息を漏らした。そして、スーツケースの上に胡座をかく。私、この娘をテーブルに戻して言った。

「えっと、夕さん」

夕さん、私を見上げた。

「右手の指切りは遊びだ。でも、左手小指の指切りは本物なんだ」

「本物って」

戸惑いながら、私、夕さんの前に座った。

「まだ、子供の頃だ。夕子、私と指切りをしようと左手を出したことがあるだろう」

そう言えばと思う、小学校で同じクラスの女の子が指切りをして、明日の約束をするのを見たんだ。私、それを見て、そうだ、夕さんと指切りをしようと思って、小指を出したことがあった

、夕さんにだめだって叱られたんだ、その時。

「指切りげんまん嘘ついたら、針千本飲ます、指切った」

夕さん、左手を後ろに隠して歌った。そして、少し両目を伏せる、言わないけれど、とっても綺麗だ、夕さんは言葉が少し乱暴だけれど、笑ったら、とても可愛いんだけど、目を少し伏せただけで、空気が凜とするんだ。

「嘘を一つついただけで、縫い針千本飲ませるぞって言うんだ、約束っていうより、脅しや呪いだろ。釣り合いがとれやしねえ」

夕さん、目を伏せて、深く溜息をついた。

「夕さん、泣きたいなら泣いていいんだよ」

「残念ながら、私は泣くのが嫌いだ。泣くことで心を癒すのだ、心の安寧を得ることができるというなら、私は自己との対話で心を癒すことにしているからな。泣く必要がないんだ」

夕さんの石頭は昔からだけれど、多分、夕さんは肉体がないのを、考えるってことで補っているから、真面目だったり、石頭だったりするんだろうなと思う。そうじゃないと、自分自身が曖昧になってしまって、消えてしまうんじゃないか、多分、そう思っているんだと思う。

「この娘は人の子供と指切りの約束をした、約束をしたというより、呪いをかけられたというほうが正解だ。だから、この娘を解放するという事は、その呪いを夕子が引き受けることになるかもしれないということだ。縫い針千本、呑むことになるかもしれない。その覚悟がなければ、この娘を飾っておくにとどめた方がいいってことだ」

「夕さん。多分、私、大丈夫だと思う。そんな気がするんだ」

「なんだよ、もう」

夕さん、頭を抱えた。

「夕子は危機意識が足りない。だいたい、水の中で叫んでいる子供の腕をだぞ、普通は触らないぞ。誰だってびびって離れるだろうに、しっかり握ってんだから」

「大丈夫だ、夕さん」

私、励ますように言った。

「何が」

拗ねたように夕さん、私を睨んだ。

「私には夕さんってお姉ちゃんがいるんだから」

私の笑顔に、夕さん、うつ伏せになって頭を抱えてしまった。

「姉として、しっかり育てたつもりだったんだけどなあ。なんで、こんな能天気になったんだ」

夕さん、大きく溜息をつくと体を起こして、スーツケースの上に座り直した。

「まあ、いろいろ言いたいこともあるけど。一つだけ言う。正座」

「はいっ」

夕さんの言葉に膝を揃えて正座した。

「夕子がどんな危険に陥っても、私はその腕を掴んで引き戻してやることはできない。だから、

私が逃げろと叫んだら、一目散に逃げろ。私が止まれって言ったら、何があっても止まれ。いいいな」

「はい、そうします」

元気に答えた。

夕さん、もう一度、溜息をつくと、ぼおっと私を見つめた。

「出来の悪い子供ほど可愛いというけれど、出来の悪い妹もまあ、可愛い、かもしれないな。

夕子、足、ゆるめていいよ」

そっと、夕さん、微笑んだ。

かっこいいなあと単純に思う。子供の頃、夕さんみたいになりたいと思った。それは、半透明になりたいっていうんじゃないで、なんていうかな、颯爽としていて、とにかく、かっこよかったんだ、いつか夕さんみたいにかっこいい女になるぞって思ったけれど、見た目年齢、夕さんを越えてしまったけど、まあ、現実は厳しい。

「夕子、この娘を膝に載せな、同じ方向を見るように膝に載せるんだ」

「えっと、はい」

「次は左手で、その娘の手首を掴む」

「こんな感じかな」

「それでいい。次は右手の小指の先でその娘の左小指の根元、とんとんとつつけ。そして、こんにちとは呼び続けろ」

すいっと夕さんの眼が線を引くように細くなる。

「とんとん、こんにちは」

右手の小指でつつく。なんだか、不思議な感じだ、何か、秘密の儀式をしているみたいだ。

「とんとん、こんにちは」

夕さんが呟いた。

「あの娘が現れるまで続けるんだ。でも、絶対に左の小指でつつくなよ。指きりの約束が成立してしまったら、夕子が縫い針千本、呑むことになるかもしれないぞ」

夕さんの言葉に緊張する。

「とんとん、こんにちは。とんとん、こんにちは」

なんだか、少し、この娘、重くなってきたような気がする、それに少し暖かくなってきたみたいだ。

「とんとん、こんにちは。とんとん、こんにちは」

「夕さん、大変だ。膝、重くなって来たよ」

「よし、夕子、眼を瞑れ」

私、ぎゅっと眼を瞑った。

子供だ、小さな子供が私の膝に座っている。左手の手首もそうだ、これは子供の手首だ。

「夕さん、眼を開けていい」

「いいよ」

眼を開けると、私の目の前にあの女の子がいた、後ろ頭しか見えないけれど、確かにあの子だ。

夕さんがいいと、唇を歪め、笑みを浮かべた。

「おはよう、よく眠れたかい」

眠りから醒めて、焦点が合ったのだろう。いきなり飛び上がると、部屋の隅に背中を向けうずくまってしまった。

「もう、夕さん、脅したらだめだよ」

嬉しくてたまらないと夕さんが笑った。夕さんはちょっと意地悪なところがあるのだ。

私、なんだかいとおしくて、女の子の頭をなでる。

「君、大丈夫だよ。あっちのお姉ちゃんもほんとはとってもやさしいんだよ」

柔らかな黒い髪だ、暖かい、まるで、生まれたてみたいだ。

女の子がゆっくりと向き直って、ごめんなさいと頭を下げた。

「謝ることないよ、折角、寝ていた君を起こしたのはお姉ちゃんだからさ」

夕さん、ついつい女の子を見下ろした。

「お前、名前は。名前を教えな」

女の子は首を横に振ると、まだ、ありませんと小さく答えた。

「お前と指切りをした友達は、名前を付けてくれなかったということか」

いぶかしの夕さんの眼を避けるように女の子が深く頭を下げる。

「まあいいや。なら、夕子、この女の子に名前を付けろ」

「え、いいの」

「いいもわるいも、名前がないと不便だろう。夕子が付けられないのなら、私が付けるぞ、例えば、五郎左衛門とか、権兵衛為助とか」

「だ、だめだよ、可愛くない」

本当にこのままだと、変なのを夕さん、付けてしまう。

「よし。私に子供が出来たら絶対付けるぞって名前を君に付けてあげよう。幸せと書いて、幸（ゆき）、君は幸だ」

女の子が驚いたように私を見つめる、そして、そっと笑みを浮かべた。

「なんだよ、夕子。平凡な名前だなあ。人形繋がり、佐七とかいいんじゃないか。強そうだぞ」

夕さんの提案は気持ち良く却下し、なんだか、三人家族の生活が今から始まったのだ。

三話

切り花は、ほんと言うと苦手なんだ。

足下の切られた花を見ていると、なんだか、自分の足が切られてしまったみたいに思えて、そのまま、引きずられるように背中から遠くの闇へ流されそうになる。

夕さんは言う、そういう時は俯いて自分の足をしっかり見ろ、ちゃんとあるだろう、ぎゅっと足に力を入れな。私は自分の足を見る、そして、足の裏を地面にぎゅっと突き刺すように押しつ

ける、そうすると、錨を沈めた船のように、どこかに流されずに済むんだ。夕さんは半透明で不思議なお姉さんだけど、言うことは、とっても、現実的なんだ。

仕事が長引いて、アパートに帰りつく頃には、遙か上空に小さな上弦の月。
アパートの前で、夕さんと幸が待っていてくれた。

「お帰り」

「ただいま、夕さん」

ばふっと幸が抱きついてくる、なんだか、反射的にぎゅうってしてしまう。

幸が顔を上げて言う。お帰りなさいって。

ただいまって私も囁く。にと幸が笑みを浮かべた。

「まるで、お母さんだな」

「いやいや、さすがにそれはないです。年の離れた妹ということで」

「そんな歌があったな」

夕さんも笑顔を浮かべると、隣に置いた段ボール箱に視線を向けた。

「夕子が会社に行っている間も、幸が鶴を折っていた。箱いっぱいになったぞ」

そうだ、ここ三日間、晩ご飯の後、ずっと折り紙を折っていたんだ。

「折るは、転じて、祈るとなる。折り鶴は幸せになれるようにという祈りの儀式だ。あとは、灯りだな。夕子、どんな花を買ってきた」

「あの、これ」

夕さんに駅前の花屋さんで買ってきた花を差し出した。

「マリーゴールド。にぎやかな花を買ってきたんだな」

「だめかなあ」

「いいよ。明るい方がいい、鉢植えだから、根もある」

「切り花の方がいいかなと思ったんだけど。あんまり」

「いいよ。マリーゴールドの根は虫を殺す成分を出す、そんな強い花だ、頼りになるさ」

幸がそっと手を伸ばし、マリーゴールドの花びらに触れる。ほわっとマリーゴールドが黄色く光り出した。

私と幸が並んで歩く、その後ろが夕さんだ。幸が私のセーターの裾を握っている。なんだか、その感触がとっても嬉しいんだ。

闇の中、マリーゴールドが満月のように輝いている。始めは住宅街を歩いていたはずなんだけど、住宅街を終えて、違う国に来たみたいだ、今は闇の中、石畳を歩いている、石畳が鈍く輝いて見えるのは雨が降っていたのか、見上げてみると、星がいくつも瞬いていた。でも、何かが違う。

「どうした、見上げて」

夕さんも空を見上げた。

「見慣れた星座がないな、とって、南半球の星座でもない。埒外の世界に入ったか」

「埒外って」

「違う世界に来たってことだ。前に来たときは随分と手間取ったけれど、縁ができたんだろう、思うより早く着きそうだ」

「なんだか、不思議だね。夕さんがいてくれて、幸がいて。不思議の世界に紛れ込んでいく」

「不思議なことなんか、何一つないさ。知らないだけ、そして、考えが足りないだけだ。前に言ったろう、一切を信じようとするな、すべてを、その頭で考えろってな」

「夕さんは厳しい」

「世界は単純である、ただ、信じるってことが好きな奴らは出来のいまいちな頭だから、自分自身が理解できない以上、世界よ複雑であれと願う。つまりは、世界の単純さを見ようとしな。それだけのことだよ」

夕さんはカッコいいなあ、単純に思う。見た目は思春期の妹なのに、やっぱり、私にとってはお姉さんだ。

ぎゅっと幸の手に力が入る、辺りに青い光が漂いはじめたんだ。

闇の中、ぽつぽつと青い光が沸き立っていく。小さな沼だ、いくつもの沼から青い光が浮かび上がっていく、冷たい青色の炎だ。

黒い地面にはいくつもの穴が穿たれている、その穴から、薄い青色した燐光がふわっと霧のように浮かび上がっている。

駆け寄って、穴を覗き込んだ。

水の中だ、水の中にたくさんの子供たちが眠っている。ふわふわ、ふわふわと揺れながら、ゆっくりと沈んでいく。

深い海を覗いているようだ、うず高く眠る子供たちが山のように積み重ねられていく、そして、よく見れば、この子たち。

「親は子供を愛しているって言うけどさ」

夕さんが私の隣で呟いた。

「子供を愛していると思込んでいる、そんな自分という存在を愛している、それを子供を愛しているんだと勘違いしている奴の方が多い。顔を殴られてあざのある子ども、ほら、あの腕は火傷だ、熱いものを押し付けられたんだろう。頭の中の子供と実際の子供の違いに腹を立てたのさ」

みんな、穏やかな寝顔だけれど、腕が違う方向に折れていたり、髪の毛が引きちぎられていたり、どうして。

「この下は大きな海みたいなものだ。穿たれたこの穴は窓みたいなものだ。子供たちが何層にも重ねられていく、下の方は、もう、潰れているだろう。せっかく生まれてきたのにな」

夕さんが瞬きをせず囁いた。

「この水は子供たちのいろんな気持ちを溶かし込んでいる。指先で、水に触れてみる」

夕さんの言葉に、そっと手を伸ばして、水に触れてみる。

じんと冷たい。目を瞑る。たくさんの大人の顔が浮かんでくる。次々と顔が浮かんでくる、みんな、優しい笑顔を浮かべている。幸せそうに笑っている。

「もしも、子供たちに親を恨む心が残っていたなら」

夕さんが呟いた。

「少しは親たちも救われるかもしれないな、気分くらいは」

夕さん、ふちに正座する。そして、まっすぐ、背筋を伸ばす。

そして、眠る子供たちに語りかけた。

「私は悪人だから、心穏やかなお前たちのその心に嵐のような波風をたててやろうと思う。前の奴らは自ら手を伸ばし、浮かびあがろうとした。だから、私の妹はその手を掴み、空へと送った。だが、お前たちは手を伸ばすことを諦め、心静かに目を閉じている、朽ちて、この青の砂粒になることを受け入れている。横たわるお前たちの下には人の形崩れ砂と化していった子供たちの骸だ」

夕さんが語りかける。山のように積み上げられたたくさんの子供たち。その一番上に眠るのは中学生くらいの女の子だ、微かに口を開き、目をつぶっている。左頬が腫れて、首が変に傾いていた。

たくさんの子供たちが大人に殺されていく、それは大人が始めた大きな戦争だけじゃない、家庭という密室の中で、一番弱いものとして災厄を引き受けられ死んでいった子供たち、交通事故だってそうだ、事故がいくらでも起こる社会を大人はそのままにしている。

夕さんが一点を見つめた。

首の折れた女の子だ。

「やあ、父親に首を折られたお前、気分はどうだい」

夕さんの言葉が届いたんだ、女の子が眼を大きく見開いた。

「おかしい、こんなはずじゃない。なんで、私はここにいるんだ。ずっと思っていたんだらう。眼を瞑るまでの間、諦め切れなかった頃までは」

「こんなにされても親を憎みきれない、なにかの間違いだったんだと思いたい。親は自分を大切に思ってくれている、いまもそう思いたいんだらう、自分の父親も母親も自分を大切に思ってくれている、なんて、私は幸せなんだってさ。そう思わなきゃやりきれないんだらう。でもさ、ちゃんとわかっているんだらう、父親におもいきり殴られて首が折れたのが致命傷だ。帰りがいつもより遅くなった、それだけの理由でさ」

多分、夕さんは人の考えや記憶を読むことができる。だから、夕さんは相手の考えや記憶を読みながら、その考えの方向を誘導していく。

女の子の表情が変わりだした、能面のような顔つきから、唇が震えて、

「泣くな」

夕さんの鋭い声に女の子が唇を噛みしめた。

夕さんが女の子に語りかける。

「泣くのは感情に溺れたということだ。泣かずに歯を食いしばって考えろ。なぜ、自分が心穏やかでいたのかを考えろ」

タさんだ、ひたすら考える、自分で考える、それがタさんの救いなんだ。

優しい言葉もないし、笑顔もない、目を見開いて、食欲に考えることを要求する、考え抜いて、道を見つけろ、本当を発掘せよというんだ。

「何故、お前は親を憎まないんだ、父親がお前を殺したんだろう。お前は父親の優しい笑顔をひたすら思い返すことで幸せな気分で行うとする。でも、その優しい顔を向けている相手は本当のお前じゃない。わかっているはずだ。父親が愛しているのは本当のお前ではなく、自分の言うことをちゃんと聞く幻想の娘だってことを。そして、それは自分ではないってこともさ。」

じわじわとタさんが、水底の女の子を追い込んでいく。

ばちばち、空気が弾けた。静電気だ。マーガレットの光を帯びた幸が座り込んでいる。髪の毛が弾けたみたいに広がってばちばちとその先が雷みたいに光っている。駆け寄っておもいきり抱きしめる。

この空気は憎しみ、怒りだ。水底の女の子の感情に呼応しているんだ。

「随分とお怒りだな」

「本当なら今頃高校生だ、勉強に遊びに夢中になっていたはずだ。お前はどんな夢を持っていた。大人になればどんな生活をしたかった。残念だな、父親の拳のせいでなにもかもが無しになってしまったんだからな」

タさん、煽りすぎだよ。

思い出す、子供の頃、私がいじめられたのを知って、タさん、仕返ししてくるって言って、言葉だけで相手を引きこもりにしてしまった。

「今頃、家族で楽しくしているんじゃないか。妹がいたんだろう。お姉ちゃん、お星様になったのってね、ほんとはこの煉獄の砂になっていくだけだ。憎くはないのか、自分だけこんなで悔しくないのか」

一瞬、空が光った。雷が走る。つんざく雷の音が背中をどんと叩く。もうちょっとだ、幸、もうちょっと我慢してね。しっかりとマリーゴールドの鉢を抱きしめた幸に囁いた。

タさんが、諭すような声で囁いた。

「なあ、お前。そうやって親や自分のこれからを憎んでさ、いま、幸せか」

その声にふっと空気が沈んだ。

「そうやって、恨んだり、憎んだりする、いま、お前は幸せなのか」

頭の中に浮かんでくる、女の子の歯を食いしばるようにして泣いている姿、そして、それをじっと見つめているのがタさんだ。

「死んでしまったことには違いない、それは戻せないさ。ただ、お前は今も楽しんだり、憎んだりする気持ちを持つことができる。なら、幻想に楽しむのじゃなくてさ、本当に幸せになりたい、そうは思わないか」

私、幸を抱きしめたまま、穴に駆け寄って、女の子を見つめた。

左手を水の中に差し出す。

「おいで、君。上がってくるんだ」

ゆっくりと女の子の左手が上がる、それにあわせて、女の子の体が軽くなったように浮かび上がってきた。

ぎゅっと女の子の手を掴んだ。冷たい、でも、なんか、嬉しい。おもいきり力を込めて引き上げた。

目の前に女の子が立っていた。

「君。君の名前は」

女の子の口が小さく動く、聞こえた、わからないって。

「よし。なら、私が名前を付ける。君は夕だ、隣にいる偉そうなお姉ちゃんと同じ名前、夕だ。そして、私は夕、君の名前を付けた、名付け親だ、つまり、私は夕のお母さんだ」

そっと夕が笑顔を浮かべた。

「夕が幸せになるのはとても簡単、簡単すぎるくらい簡単なことなんだよ。周りの人たちを、たくさんの人たちを幸せにすればいい。そうすれば、夕も幸せになる。幸せでいられるんだよ」

夕が笑顔を浮かべて頷いた。ぎゅっと抱きしめる。腕の中でさらさらとこぼれていく、砂が落ちていく、目の前に半透明になった夕がいた。

「しっかりね、夕」

幸が箱から折り鶴を取り出し、夕に手渡した。

ありがとう、夕が笑顔で言う。そして、ずっとその姿を消した。折り鶴がふわりと浮かび飛んでいく。

「たくさん、折ったのにな」

溜息混じりに夕さんが呟いた。

穴の底にはいまでも眠る子供たちが居る。

「衝撃で、並んで浮かんでこないかなと思ったんだけどな」

「閉じこもってしようという決心を変えさせるのは難しいよ」

「頑固者にも困ったもんだ。そうだ、幸、残った折り鶴、穴に撒いておけ、釣りによくやる撒き餌みたいに、勝手に浮かんで来る奴もいるかもしれない」

「夕さんは言葉が悪いなあ」

夕さんはあぐらをかくと、にかっと笑った。

「私は悪人だからな」

「夕さんが悪人って初めて聞いたよ」

「善い奴は優柔不断だ、ガツンと行くときには悪人の方がいいんだよ」

思い切って夕さんに尋ねてみる。

「ね、あのね、夕さんもここにいたのかなあ」

「わからないな。記憶がない。ただ、もしも、あたしみたいなのがもう一人いて、偉そうなことを抜かしていたら嫌だな、うっとおしい」

夕さん、気楽に笑うと立ち上がった。

「帰ろう、お腹減った。夕子、濃い味の料理を作ってくれ」

「うん。中華の濃いを作るよ」

にかっとなさんが笑った。

「幸、頑張ったな。マリーゴールドの強い黄色は正解だった。帰ったら水をやれ。お前の命の恩人だ」

幸がぎゅっとマリーゴールドの鉢を抱きしめて頷いた。

なんだか、思う。夕さんは、いつまでも私のお姉さんだ。それを言うと、しっかりしろと叱られるので黙っておくけど。